

【研究ノート】

## ウェブメディア論の射程と限界

Range and Limit of “Web media”

筑瀬重喜

CHIKUSE, Shigeki

キーワード： ブログジャーナリズム； 市民ジャーナリズム； EPIC2014； メディアの信頼性；  
電子ペーパー； 新聞の周期的総括性； 両義性； 紙の本質

Received: 2007.9. 21

### 1. はじめに

「ブログをはじめとするウェブ技術の進化によって新メディアが生まれつつある。信頼を失いつつあるマスメディア、中でも新聞は新興メディアに地位を奪われるであろう」という趣旨の発言が相次いでいる。『ネットは新聞を殺すのか』といった挑発的な題名の書籍も出ている。このような考え方を「ウェブメディア論」と呼ぶことにする。これらの主張に接しながら、ウェブの進化が人々の意識を揺さぶるとともに、社会を成り立たせる原理にもかかわる変化が押し寄せていることを意識せざるを得ない。ただ議論の可能性は認めるものの、おのずと生じる限界について論者が無自覚であることが気になった。この小論は、論者によって「常識」として見過ごされている論点を俎上にのせることで、ウェブメディア論を相対化することを目的としている。取り上げた論点は「マスメディア、中でも新聞は読者の信頼を失いつつある」と「紙は制約された劣性の媒体であってすぐにでも電子媒体に代替が可能だ」である。背後には「メディアの信頼性とは何か」「紙はメディアにとって何か」という根源的な問いを含んでいる。

### 2. ウェブメディア論とは何か

「ウェブメディア論」といっても幅が広い。小論では以下の人々やサイトの主張とする。

河内孝（元毎日新聞社常務取締役、『新聞社：破綻したビジネスモデル』の著者）▽鳥越俊太郎（元サンデー毎日編集長、元オーマイニュース編集長）▽湯川鶴章（時事通信編集委員、『ネットは新聞を殺すのか』の著者）▽歌川令三（元毎日新聞編集局長、『新聞がなくなる日』の著者）▽佐々木俊尚（元毎日新聞記者、『フラット革命』の著者）▽EPIC2014（米国サイトで公開されているフラッシュムービー）

共通する主張は次のとおりである。現状分析では「マスメディアはお仕着せの情報を流す権力的な存在だ。中でも新聞は信頼を失いかけている」と見る。将来については「ウェブの進展で、従来のマスメディアに代わるメディアが誕生する」としている。後半の「具

体的にどんな形態の代替メディアが登場するか」ではさまざまな考えがある。まとめると次のようになる。「△」は○とも×ともつかないケース。「？」は不明な場合を示す。

表 1 ウェブメディア論の分類

	紙媒体中心は続くか	新聞社は維持されるか	報道機関は残るか	ジャーナリズムは維持されるか?	具体例・論者
I	×	○	○	○	電子ペーパー・電子新聞 (河内)
II	×	△	○	○	市民ジャーナリズム (鳥越)
III	×	?	×	○	ブログジャーナリズム(湯川、歌川、佐々木)
IV	×	△	×	×	EPIC2014

タイプ I は、「紙は衰退しても薄くて携帯可能な電子ペーパーを使った電子新聞に移行することで新聞社は存続する」という立場である。河内は、印刷されても配達されない「押し紙」が販売店の経営を圧迫しているとしており、新聞社が生き残る最後の手段として電子ペーパーに活路を求めている<sup>1)</sup>。

タイプ I にかろうじて残る「新聞への評価」が下がったのがタイプ II の「市民ジャーナリズム」である。タイプ II は、「マスメディアは市民の視点を欠いている」という批判から生まれた。具体的には、オーマイニュース (<http://www.ohmynews.co.jp/>)、JanJan (<http://www.janjan.jp/>)、ライブドア PJ ニュース (<http://news.livedoor.com/>) など、「紙媒体の新聞も新聞社も衰退する。しかし報道機関の組織は残る」という考え方である。記事を点検して採否を決めるというデスク機能を残す点で新聞社を踏襲している。違うのは記者がアマチュアであることである。新聞社は選抜した人材に記者教育を施す。市民ジャーナリズムでは、記者を登録制にしてはいるものの、基本的にアマチュアである。

タイプ III は、紙としての新聞も新聞社も衰退し、「ブログジャーナリズム」というブログの集合が主体のジャーナリズムを引き継ぐとするものだ。湯川らの主張によると、だれもがブログを通じて世界へ発信できることで、既存のマスメディアの論評と質的に区別のない優れた論評を発信するブロガーが出現した。マスメディアが独占的に担ってきた論評機能をめぐり競争が起こり、ブロガーが勝利を収めるケースが出ているとする。放送の例になるが、米国 CBS は 2004 年、「若き日のブッシュ大統領がベトナム行きを逃れるために、有力政治家であった父の威光で州兵になった」という疑惑を報道した。1972 年に作成されたとする文書を証拠として示した。ところがあるブロガーが、書式から最近作成された偽物であることを見抜いた。CBS は誤りを認め、キャスターが辞任に追い込まれた<sup>2)</sup>。

ブログジャーナリズムがマスメディアを代替するかどうかを検討する際に問題になるのが、「炎上」である。炎上とは、ブログのコメント欄やトラックバックに罵詈雑言に近い批判的意見が多数集まることである。もともとブログのデータは特定のサーバーにしかない。その意味では「ホームページ」と差がない。ブログが「マス」たりうるのはコメント欄やトラックバックがあるからである。その肝心の機能で混乱を招きかねない不安定なメディアをジャーナリズムと呼べるのかどうかは疑問が生じる。

こうした混乱を避けるために期待されるのが「集合知 (Collective Intelligence)」という概念である。集合知とは、「多くのユーザーが参加して知恵を出し合うことで知識の蓄積が膨らみ、最終的に価値のある知識になる」という考え方である。なお集合知の結実の例とされるのが、オンライン百科事典ウィキペディア (Wikipedia) である。ブログジャーナリズムは、集合知が働く仕組みさえ作れば立派なジャーナリズムになるという考え方であろう。

集合知で想定されている働きには、ジャーナリズムの基本的機能であるフィルタリング、つまり社会にある有象無象の情報から価値ある情報を選び出す機能も含まれているであろう。タイプⅠ～Ⅲはこうした機能をそれぞれ新聞社、報道機関、集合知に委ねようとしているといえる。そのフィルタリングを人工知能に任せるのがタイプⅣの発想である。その代表は「EPIC2014」 (<http://probe.jp/EPIC2014/>) である。

これはメディアの未来を描くフラッシュムービーである。検索サイトのグーグルが、オンラインショッピングのアマゾンと合併して「グーグルゾン (Googlezon)」となる。グーグルゾンは個人がネットに発信したニュースや写真を蓄積し、その情報を、個人個人の属性や関心に応じて編集し届けるという。このシステムを Evolving Personalized Information Construct (進化型個人向け情報構築網) つまり EPIC と呼んでいる。人々はお仕着せのマスメディアのニュースに代わって、関心のあるニュースだけが届くようになる。マスメディアの代表、ニューヨーク・タイムズは抵抗するが最後は敗れる——という話である。

### 3. ウェブメディア論の「常識」を疑う

#### 3.1. 新聞は信頼を失ったか

先ず取り上げるのが、ウェブメディア論者が無条件の前提としている「新聞は信頼を失っている」という命題である。

##### 3.1.1. 新聞の信頼を醸成するプロセス

新聞が信頼を失った理由として論者がまっさきにあげるのは「誤報」である。たとえば佐々木は『フラット革命』で、2006年のライブドア報道で毎日新聞が2月6日1面の「株売却益を特別利益に計上／純利益黒字を装う」と報じたのに対して、あるブロガーが、「株売却益を特別利益に計上することは違法でも粉飾でもない」と記者の不勉強を指摘したことを紹介している<sup>3)</sup>。これはたしかに許容できない種類の誤りである。

現代の一般的な新聞社の対応は次のとおりになるであろう。予防措置として新聞社は少なくとも二点、つまり、特定の組織を貶める目的で捏造された情報を排除することと、取材活動が適切に行われたかどうかを管理することで努力をする。それでも避けきれない誤報が生じた場合は①訂正して謝罪する②誤った理由を検証し報告する③関係者の処分——という一連のプロセスが付随する。

ウェブメディア論者の「新聞は信頼を失っている」という主張とは裏腹に、少なくとも統計的には新聞は信頼を維持している。日本新聞協会が隔年で行っている「新聞の評価に対する読者調査」(図1)である。低落傾向にあるとはいえ、70%を越す評価を得ている<sup>4)</sup>。

もちろん新聞協会の統計であるから、「この数字が世論そのものだ」というつもりはないが、少なくとも「論者がいっただい新聞の信頼度は低くない」とは言えるであろう。

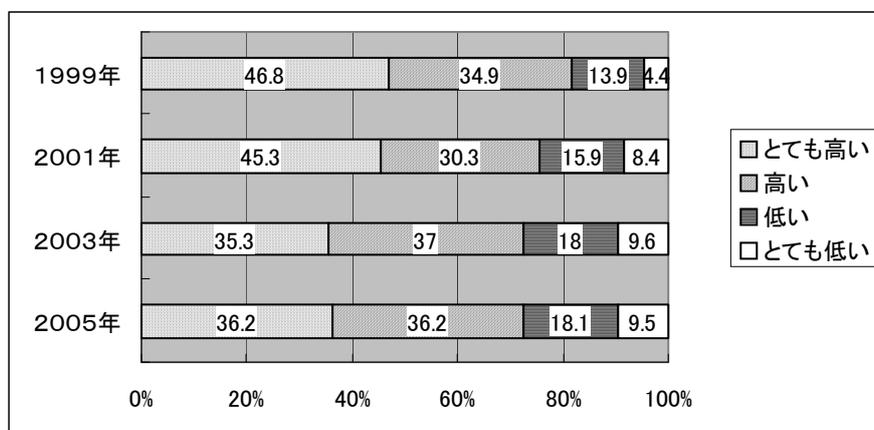


図 1 日本新聞協会「新聞の評価に関する読者調査」の「信頼度評価」から

相次ぐ「誤報」にもかかわらず、まだ相当数の人々から新聞が支持を得ているとすれば、その要因を形成しているものの一つが、先に述べた新聞社側の誤報発生後の対応ではないだろうか。①訂正して謝罪する②誤った理由を検証し報告する③関係者の処分——という一連のプロセスは、読者の信頼を醸成するプロセスでもあるのである。以下、そうした意味合いを込めて①から③のプロセスを「信頼醸成プロセス」と呼ぶ。

ネットのジャーナリズムには、新聞が備えている信頼醸成のプロセスが欠けている。ブログが誤報を載せてもブロガーは詫びることはあっても責任を取ることはない。責任の取りようがないのである。受け手も要求しない。誤報で受け手が損害を被っても、「だまされたほうのリテラシーが低いからだ」と逆に批判される。「マスメディアが一手に引き受けていた責任が受け手へと分散される」という「受け手への責任分散化」の考えは、ブログジャーナリズムだけでなくウィキペディアにしても似た状況である。執筆者が不明である以上、誤りの責任を追及する方法がない。「リテラシー不足で信じた」受け手の自己責任なのである。だから「ネット」というだけで人々は「眉に唾をつけて」見ているのである。

そうした事態は、次の事例からも推定される。2005年10月18日、「ヤフーニュース」にアクセスした人は「中国軍、沖縄に侵攻」という見出しの「共同電」記事に驚いただろう。「東シナ海を哨戒中の自衛隊機に中国艦艇が砲撃し、戦闘機が沖縄県上空に侵攻した」という内容だった。もちろん虚偽で、記事を書き込んだ犯人はその後逮捕されている。

これを見た人の行動を推測してみよう。彼は直ちに別のサイトやテレビ、新聞で裏取りを試みたに違いない。騒ぎになっていないことを確認して、「ヤフーニュースは誤報か不法な書き込みだ」と判断し、それ以上の行動はしなかったと思われる。事実この事件は、騒動を願った犯人の思惑とは裏腹に、何の騒ぎも引き起こさないまま人々の記憶から消えた。

もし新聞社が同等の状況、つまりサーバーに侵入した犯人が偽記事を配信し、それが一面トップに掲載された場合を考えてみよう。ヤフーニュースの場合とは比較にならない規模の騒ぎになっていたことは想像に難くない。

この事例は、ニュースの真偽判定では、メディアに「信頼度の濃淡」があることを示している。「ニュースサイト以外のネット情報<ニュースサイト<マスメディア」の順に信頼度が上昇しているのである。人々は低い信頼度のメディアで知った情報は、より信頼度の高いメディアで確認するのであって、その逆はない。だからこそネットに結果的に誤った情報が流れてもだれも騒がないのに対して、新聞が誤った情報を流せば激しく批判されるのである。「新聞への批判の激しさ」は、「新聞への信頼度の高さ」の左証でもあるのだ。

### 3.1.2. EPIC の悪夢

タイプIVのEPIC2014のように、マスメディアが果たしている機能を人工知能が代行しうるかどうかについても疑問がある。3.1.1で述べた「信頼醸成のプロセス」は、「責任を負った特定の人物が存在し、問題があったらその人物が責任を取る」という一連の *performative* な経過を抜きにしては成り立たないのである。言い換えれば、信頼醸成のプロセスは、*constative* な記述で構成されるプログラム化——人工知能化——は不可能なのである。

EPIC2014には、信頼醸成など不必要なのかも知れない。カスタマイズされて届くニュースの中には、受け手を陥れようという情報が含まれている恐れは十分にある。それを見極めるかどうかは、ここでも最後は受け手個人の責任とならざるをえない。人々は常に猜疑心を抱いてニュースに接しなくてはならないのである。近代国民国家は国民に共通で公共的な部分は国家が担うことで、国民の負担を軽減してきたといえる。マスメディアも国家とは別の形で公共的なコミュニケーション部分を担ってきた。EPIC2014は、少なくともコミュニケーションでは公共情報を人々が共有しない世界を想定している。近代国民国家の基礎をも崩しかねない要素を含む世界をだれが望むのだろうか<sup>9)</sup>。

混乱と不信が渦巻くEPIC2014の悪夢の世界を、少なくとも筆者は受け入れることはできない。ただEPIC2014を「思考実験」と考えれば、さまざまなことが炙り出される。たとえば、マスメディアではいざとなれば信頼性を醸成するプロセスが作動すると人々が信じているからこそ「取り敢えずマスメディアを信用して行動しよう」と判断していることが分かる。この「人々」の中にはウェブメディア論者も含まれる。どれほど新聞不信に凝り固まっている論者でも「火山が大爆発の恐れがある」と新聞が報じたら避難を考えるであろう。マスメディアがこうした働きを果たしているからこそ安定した恒常的な社会が成り立っているのである。

マスメディアは、ウェブメディア論が言うように情報を強制的に押しつける面があることも事実である。しかし別の面では、社会の構成員に共通の情報をもたらし共通意識を培うことで安定した社会をもたらしている。マスメディアは常に「両義的」なのである。

両義性は理解されにくい概念のようだ。常識では、「一つの認識対象には一つの意味しか対応しない」と信じられているからである。両義性を直感的に理解してもらえる最良の方法は心理学の「反転図形 *reversible figure*」であろう。たとえばE・J・ルビンの考え



図2 ルビンの壺

た「ルビンの壺」(図2)は、図形は一つであるにもかかわらず、「白を図、黒を地」とすれば「壺」に見え、「黒を図、白を地」とすれば「二人の向かい合う人物」に見える。どちらか一方が正解でもう一方が誤りだというわけではない。一つの対象が二通りに理解されるのである。

マスメディアも同じである。一つの対象でありながら「権力的で強圧的な存在」でも「社会を構成する要素」でもある。どちらか一方が正しいというわけでもない。

### 3.2. 紙媒体は消え去るか

ここまでの論議で「表1のタイプⅢやⅣは確かに無理がある」と納得した人も「ただⅠやⅡだけ、つまり電子ペーパーだけは実現するのではないか」と考えるかも知れない。「印刷機、配送トラック、配達人のコストを削減できるから」という訳である。後半は、もう一つの論点「紙は制約が多い劣った媒体であって、電子媒体に代替が可能だ」に移ろう。

#### 3.2.1. 時間空間の制約はメリットでもある

まず、この前半の「紙は制約の多い劣った媒体である」について考える。常識的にはそのとおりである。「紙を媒体とする新聞は締め切りという時間的な制約がある。さらに、紙面という空間的制約もある。電子媒体にはどちらの制約もないから有利である」からである。しかし実際は、時間と空間の制約はデメリットであると同時にメリットでもあるのである。

新聞記事はトップから1段記事にいたるまで、分類・序列化されている。この分類・序列化が決まるには次のような過程が必要である。まず1日に1回ないし2回訪れる締め切りでもって、掲載すべき記事の項目が確定する。しかる後、確定した項目について、ニュースの大きさや性格に応じて分類・序列化がなされる。

これに対してニュースサイトのように時間的空間的限界がないメディアは、ニュースの価値は「新しさ」でしか判定できない。だから重大ニュースといえども、新しいニュースがその後に発生すればトップページから消える羽目になる。情報量でも新聞に掲載される以上の情報を載せることはできても、逆に多すぎることで要点が不明になる。もちろん速報を制限なく流すことができるネットの利点はいうまでもないが、制約があることによるメリットも忘れてはならない。つまり時間と空間の制約も「両義的」であるのだ。

半日なり1日単位で総括的に世界の出来事を把握するという新聞固有の特質を、筆者は「周期的総括性」と名付けている<sup>6)</sup>。こうした特質のおかげで、新聞を日々読んでさえいれば、必要最小限の情報を漏れなく短時間で知り、「世界」がわかるのである<sup>7)</sup>。

哲学者I・カントは認識論の立場から時間と空間について考察した。彼は「時間と空間という感性の形式のフィルターと思考の枠であるカテゴリーを通じて、人間は世界を認識する」と主張した。その論議の中から「鳩のエピソード」と筆者が名付ける話を紹介しよう。筆者の見方を端的に代弁してくれるからである。ある鳩が、「飛ぶ際の空気抵抗があるので思い通りのスピードが出せない」「空気さえなければもっと早く飛べるのに」と嘆く話である<sup>8)</sup>。もちろん制約に見える空気がなければそもそも「飛ぶ」という行為が不可能であるか

ら、鳩の思いには意味がない。同様に、新聞は時間と空間の制約の中にあるからこそ、簡潔な表現で明確な価値判断を読者に伝えることができる。時間と空間の制約を「桎梏」としかみなさないウェブメディア論者は、この鳩に似ている。

### 3.2.2. 先が見えない電子ペーパー

紙が消滅するためには、その受け皿となる「電子新聞」の技術的な見通しが立っていないなければならない。過去には何度も試みられたがまだ成功したとはいえない。

「電子新聞」といっても時代で定義が違ふ。おおまかに分類すれば次の三つある。

- ①【1970年ごろ】ファックスで紙面を届ける方式（大阪万博会場で実演）
- ②【1995年前後】（i）ネット経由で流し、受け手がパソコン閲覧ソフトで見る方式（ニュースサイト）（ii）テレビ電波経由で携帯端末に送り込む方式（産経新聞などが実用化）
- ③【2001年以降】新聞紙面の画像をそのままインターネット経由でパソコンに取り込む方式（産経新聞のNet Viewなど）

このうち成功したのは②（i）、現在の「ニュースサイト」のみである。紙を離れた純粋な電子新聞の試みは③も含めて成功しているとはいえない。

かつて「パソコンで読むようになれば紙が不要になる」と考えられていた。しかし、逆に紙の消費は増えた。③が受け入れられないのも、この問題と軌を一にする。細かい文字をディスプレイで読むことは苦痛だからである。面谷信らは、校閲作業をディスプレイと紙でさせる実験を試み、ディスプレイの方が紙より間違いが多い上に、被験者への疲労が激しいことを確認している<sup>9)</sup>。紙から電子への全面移行は、身体が拒否しているのである。

こうした経験から、薄くて折り曲げられることに加えて眼への負担を軽減する機能を備えた電子ペーパーが構想されている。しかし、見通しはよくない。実現しなければならない機能が見逃されているからだ。たとえば、傍線を引き文字を書き込む機能である「加筆性」や、切り抜いて持ち運びできる「スクラップ性」などが考えられる。加筆性について、面谷らは、電子ペーパーの技術目標を設定する中で、「贅沢項目」として切り捨てている<sup>10)</sup>。

たとえば、駅の表示「自動きっぷ売り場はこちら」のように、一度読めば理解できる文章を読む（こうした読みを「直読型の読み」<sup>11)</sup>とする）のであれば加筆性は不要である。しかし、新聞の解説記事のように主張を含む文を読解する際には、加筆性のないことは決定的な欠陥となる。そもそも「読解」とは、対象となる文の構造を読み解くことで成り立つ。文の構造はしばしば複雑に入り組む。場合によっては数十行を越えて呼応し合う。こうした読みを「読解型の読み」と名付ければ、読解型の読みには、加筆性が不可欠なのである<sup>12)</sup>。

もちろん「ニュースは直読型の読みで十分」という人もいる。こういう人は新聞をやめるだろう。しかし、あらゆる人が直読型の読みだけに移行することは考えられない。読解型の読みは、複雑化する現代社会を知るためには欠かせない読み方であるからである。

## 4. まとめ

ウェブメディア論によれば、今の状況は新旧メディアの闘争の場である。ボクシングに

たとえば、ブログなど新メディアが弱り果てたマスメディアをコーナーに追い詰めていると映るのだろう。しかし小論で見たように現実には、ウェブメディア論者も含め人々は、「信頼度はネット情報が低くマスメディアは高い」とみなしている。「マスメディアの伝えることを、取り敢えず社会的な了解事項だ」とする前提で社会は動いているからである。マスメディアには、権力的であるというネガティブな面だけでなく社会の安定性に寄与するというポジティブな面もある<sup>13)</sup>。このマスメディアの両義性を無視して、マスメディアの権力性のみを強調してマスメディアの廃絶を願う論議は、英語の諺にある「風呂水とともに赤ん坊を捨てる (throw out the baby with the bathwater)」のと同じである。

もちろん、ネットのメディアが無意味であるということではない。マスメディアが信頼醸成プロセスをたどる中ではたとえばブログジャーナリズムは重要な位置を占めるだろう。もともと記者は、書き手としてはプロかもしれないが、世間の諸事に関してはアマチュアである。ある分野に長けたブロガーが指摘するのであれば、検討の上受け入れるのは当然のことであろう。それによって、より妥当なジャーナリズムが成立するのだから。メディアの将来はマスメディアとウェブジャーナリズムの協力で開くことができる。

この小論は、2007年7月に関西学院大学と立命館大学で各1回講義の機会をいただいた際に論じた「Web2.0時代の新聞の行方」を基盤にしている。質問を浴びせてくれた学生諸氏に感謝したい。

## 註

- 1) 河内孝『新聞社：破綻したビジネスモデル』2007年、新潮社、p.167
- 2) 湯川鶴章はこの話を繰り返している。たとえば『プロの記事』はブログより価値があるか? 『サイバージャーナリズム論：「それから」のマスメディア』2007年、ソフトバンククリエイティブ
- 3) 佐々木俊尚『フラット革命』2007年、講談社、pp.54-55
- 4) 日本新聞協会『新聞研究』2005年、653号、p.50
- 5) 人々がカスタマイズされたニュースを得る究極の世界では、人々同士の分断化が避けられない。そうした問題点を指摘したものに、キャス・サンスティーン『インターネットは民主主義の敵か』(2003年、石川幸憲訳、毎日新聞社)がある。
- 6) 筑瀬重喜「新聞+ニュースサイトは最強メディア——新聞社における戦略的融合の視座」『朝日総研レポート』2002年、第156号
- 7) ここで「空間と時間に制約を設けたページをネット上で作成すれば周期的総括性など容易に実現できるはず」という反論があることは承知している。ただ現実にもそうしたページを作成しても、アクセスが極めて少ないのが現実だ。人々はネットに接続したとたん意識構造が変わり、「新しさ」しか求めないのかもしれない。
- 8) カント『純粹理性批判 上』1961、篠田英雄訳、岩波書店、p.64
- 9) 面谷信ほか「電子ペーパーのめざす読みやすさに関する研究：紙とディスプレイの読み取り作業比較実験からわかってきたこと」『日本画像学会誌』2005年、第44巻第2号
- 10) 面谷信『紙への挑戦電子ペーパー：情報世界を変えるメディア』2003年、森北出版、p.18  
なお「スクラップ性」は筆者の造語であるが、それに相当する概念は同書にない。
- 11) 「直読」は、漢文を上から下へ読むことであるが、ここでは「一読して理解できる読み方」とする。
- 12) 「読み」に二種類あることは、外山滋比古が『「読み」の整理学』(2007年、筑摩書房)で指摘している。ただ外山は紙の上で読むことを前提として、既知の情報を読む「アルファ読み」と未知の情報を読む「ベータ読み」に区別している。ここでいう「直読型の読み」「読解型の読み」の論議とは前提が違う。
- 13) 言うまでもないが、戦前の言論統制化においてはこのマスメディアの「ポジティブな面」が国論の統一に利用されたことを見逃してはならない。